

38 張文仲の鍼灸について

宮川隆弘

日本鍼灸研究会

張文仲は、唐代前期（七世紀末頃）の医家である。

『旧唐書』卷一九一・列伝第一四一によれば、洛州洛陽（河南省洛陽）の人で、若くして同郷の李虔縦、京兆の韋慈藏とともに医術を以て名を知られた。則天武后の初年には侍御医に任ぜられ、勅を奉じて当時の名医とともに『療風氣諸方』を撰した。また風病一二四種、氣病八十種の医治につき奏上し、『四時常服及輕重大小諸方』十八首を撰した。晩年は尚葉奉御となり『隨身備急方』三巻を著している。武后・中宗以降、諸医はみな張文仲、李虔縦、韋慈藏の三家を重視したという。『唐書』芸文志に「張文仲隨身備急方三巻」、『宋史』芸文志に「張文仲法象論一卷」を著録するも、全て佚亡している。『外台秘要方』に「文仲」あるいは「張文仲」として多くの佚文が見られるほか、『医心方』『證類本

草』『太平聖惠方』などにも散見している。特に『外台秘要方』における引用は、『千金方』、『千金翼方』などの当時主要な医学書と同様に頻繁に引用されていることから後代に及ぼした影響が非常に大きかった医学家の一人であると考えられる。

管見によれば、張文仲の鍼灸条文は、『外台秘要方』及び『太平聖惠方』巻百において見ることができ。なお王執中の『鍼灸資生經』にも幾ばくかの張文仲関係鍼灸条文（『明堂下經』として引用）が見えるが、それらは『太平聖惠方』巻一百に拠るものと判断される。その内容であるが、『外台秘要方』所載の鍼灸条文（「又方」を含む）は、概ね病症に対して正規の孔穴または奇穴に施灸するものである。一方、『太平聖惠方』所載の鍼灸条文は四条ではあるが、独特な治療方法が見られる。例えば「療風眼卒生翳膜、兩目疼痛不可忍、灸手中指本節頭節間尖上。三壯。艾如小麦大。患左目、灸右、患右目、灸左。」というように、患側の反対側に取穴するという方法が載せられている。これは、『靈樞官鍼篇』の「巨刺者、左取右、右取左。」、『素問』調經論

の「痛在左而右脈病者、巨刺之。」、同書繆刺論の「以刺經穴爲巨刺、刺絡穴爲繆刺、皆左取右、右取左。」といった施鍼方法を灸法に応用したものであると考えられる。なおこうした方法は、『太平聖恵方』では張文仲以外でも「華他療男子卒疝、陰卵偏大、取患人足大指。去甲五分、内側白肉際。灸三壯。烏如半棗核大。患左取右、患右取左。」という記載に見られるため、唐代を通じてかなり一般的であったかもしれない。その他の三条の内容は、「救婦人橫産、先手出、諸般符藥不捷、灸婦人右脚小指尖頭三壯。炷如小麦大。下火立産。」や「療腰重痛、不可轉側、起坐難、及冷痺、脚筋攣急。不可屈伸、灸曲杖兩文頭。左右脚四処各三壯。每灸一脚、二火齊下、艾炷纔燒到肉、初覺痛、便用二人兩辺齊吹至火滅。午時著灸至人定已來。自行動臟腑一兩廻。或臟腑轉動如雷聲。其疾立愈。此法神効。卒不可量也。」というように、特定の病症に対して経外奇穴を取穴し、「下火立産」または「下火立愈」とその特効的効果を強調するものである。なお条文においては、単に症候名を挙げるにとどまらず、詳細に病症を説明する場合が

見られることから、詳細な病態観察に基づき鍼灸が行われていたことが推定される。